

古代アメリカ学会 東日本部会第16回研究懇談会のお知らせ
修士論文発表会

下記のとおり、東日本部会第16回研究懇談会を開催いたします。皆さま、ぜひご参加ください。非会員の方も参加できますので、関心のお持ちの方にはぜひお声をおかけ下さい。事前申し込みは必要ありません。

研究懇談会概要：

今回の研究懇談会は、修士論文発表会と題し、最近修士論文を提出された/提出予定の若手研究者、村瀬正紘会員（東京大学大学院修士課程）と佐藤優音会員（東京大学大学院修士課程）にその研究成果についてお話しいただきます。対面での開催とし、コメントーターのみオンラインでご参加いただきます。活発な議論・意見交換をしていただければ幸いです。

日時：2024年3月9日（土）14:30～16:40

場所：東京大学総合研究博物館 7F ミューズホール（対面開催）

・14:30-14:35 趣旨説明

・14:35-15:35 発表①

村瀬正紘（東京大学）

「インカ国家と地方社会の関係について

ー植民者集団ミトマクーナの実態に着目してー」

・15:50-16:40 発表②

佐藤優音（東京大学）

「アンデス形成期末期におけるペルー北部中央高地の地域間交流」

・コメントーター：渡部森哉（南山大学）

発表①

「インカ国家と地方社会の関係についてー植民者集団ミトマクーナの実態に着目してー」

村瀬正紘（東京大学）

本発表では、先スペイン期アンデスのインカ社会において各地に派遣されたミトマクーナと呼ばれる植民者集団を扱う。インカ国家が地方社会を統合する過程で行った施策のうち、ミトマクーナをめぐる移住政策は最も重要なものの一つと位置付けられるが、インカ国家により徴発されたミトマクーナが果たしていた役割や彼らの社会的な地位に関しては

未解明の部分が多く、とりわけ派遣先の共同体における位置付けや在地の住民との関係といった観点からの研究はほとんど実施されていない。発表者は、インカ国家によって派遣されたミトマクーナが移住先のアイユと結んだ関係について、植民地期アンデスにおいて編纂された巡察史料および訴訟記録の分析に基づき、修士論文を執筆した。その内容を中心に、ミトマクーナに関する研究の背景、および今後の研究における展望と課題も含めて発表を行う。

発表②

「アンデス形成期末期におけるペルー北部中央高地の地域間交流」

佐藤優音（東京大学）

本発表では、アンデス文明形成期（紀元前 3000-紀元後 1 年頃）の末期（前 250-後 1 年頃）における北部中央山地の地域間交流について、土器の分布域に着目し考察を行う。発表者は、来年度に修士論文の提出を予定しており、本発表はその中間報告として構想と今後の議論の展望を提示することを目的とする。

形成期末期は、形成期後期（前 800-前 250 年）のあいだアンデス広域に大きな影響力を持ったチャビン・デ・ワントル遺跡の活動が停止したことによって、各地域が新たな地域内・地域間関係を再構築する時期であった。砦が建設されるなどアンデス各地で地域内の統合が強まり地域外との緊張が高まった一方で（加藤・関編 1998: 262）、北部中央高地のワヌコ盆地では、盆地外の近隣地域とも土器の器形や装飾の面で類似した要素を共有するようになるなど、盆地外との対立ではなく交流を増加させるという傾向が確認されている（Matsumoto 2020: 117）。形成期末期における北部中央山地の地域間交流は、末期社会の新たな在り方を示す重要な要素であるにもかかわらず、各地方の境界にあたる地域での発掘調査の不足などが障害となり、これまで十分な研究がされてこなかった。

そこで本発表では、形成期末期にワヌコ盆地と近隣地域で見られる土器の分布域に着目する。これまで地域別に扱われることの多かった各地の調査報告の情報を精査・集成することで、発掘調査の不足を補う地域横断的な議論を行う。

参考文献

加藤泰建、関雄二 編

1998 『文明の想像力：古代アンデスの神殿と社会』角川書店。

Yuichi Matsumoto

2020 *Prehistoric Settlement Patterns in the Upper Huallaga Basin, Peru*. The Yale Peabody Museum, New Haven.

主催：古代アメリカ学会

問い合わせ：*を@に変えてください。

金崎由布子（東京大学）〔東日本部会担当〕 kanezaki*um.u-tokyo.ac.jp

古代アメリカ学会事務局 info*americaantigua.org